

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2023
春号
第 68 巻 1 号

無料
Free

表紙の1枚 …………… 1	付属園だより2 …………… 5
・ライチョウ飼育の60年	・付属園の猛禽類たち
企画展特集 …………… 2・3	さんばく研究最前線 …………… 6
・ホネ展	・下駄スケートの歴史
付属園だより1 …………… 4	博物館のひろば …………… 7
・ミヤマオダマキ	2023年度 博物館年間スケジュール …………… 8



写真：1963年 ニワトリ(名古屋コーチン)によるライチョウ孵化の取り組み

ライチョウ飼育の60年

栗林 勇太

1963(昭和38)年に山岳博物館でライチョウの飼育を開始して、今年でちょうど60年になります。国内で唯一、昭和の時代から継続的にライチョウの飼育を行ってきた山岳博物館の飼育羽数は、なんと200羽以上。今では山岳博物館以外でも飼育が行われ、中央アルプスでは他の動物園等と連携した野生復帰の取り組みが進行し、一部施設では人工授精の取り組みが行われるなど、ライチョウ保全の取り組みには著しい技術的進歩がみられます。一方で、山岳博物館の飼育の歴史を振り返ると、困難の多さに驚きます。

1963年当初は、ニワトリ(名古屋コーチン)にライチョウの卵を抱かせて孵化させる取り組みが行われ、孵化には成功したものの子育てがうまくいかずに、短命で終わりました。1968(昭和43)年には、爺ヶ岳で生息しているライチョウの親子(2家族)を、現在の山岳博物館の場所に移動させて飼育を行い、繁殖させる取り組みが行われました。高山帯と比べて気温が高いため、夏期は「避暑」として、

扇沢(現在の扇沢電気バス乗り場付近)に移動させ、秋に再び山岳博物館に戻ることが行われました。しかしながら、寄生虫などによる死亡が相次ぎ、一時飼育は中断となりました。1970(昭和45)年に入ると、当時は家庭にも普及が進んでいない、「冷房」が完備された飼育舎が完成し、以後2004(平成16)年まで、爺ヶ岳などから卵を採取し、山岳博物館で孵化・飼育する取り組みが続きます。その間、何世代にもわたった繁殖が成功する一方で、何度も感染症や原因不明の死亡による全滅がありました。

多くの困難を経て、2015(平成27)年以降は、それまでの博物館の知見等を活かした新たな飼育方法により、全国で飼育が行われるようになり、ここ数年でライチョウ飼育施設は、山岳博物館も含めて7ヵ所に広がりました。

これからも、ライチョウ保全活動の中で、新たに成功と称されることがあるかもしれません。ただそれは、多くの積み重ねの上にあることを、山岳博物館の歴史を通じて知ることができます。(市立大町山岳博物館 学芸員)

- ◆市立大町山岳博物館は、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。
- ◆開館時間は、午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)です。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー(長野県民割引)」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は4月15・16日、5月20・21日、6月17・18日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名/未就学児/大町市内小・中学校に通う児童・生徒/大町市内在住の65才以上の方と高校生》このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。



博物館施設案内
はこちら

企画展 ホネ展

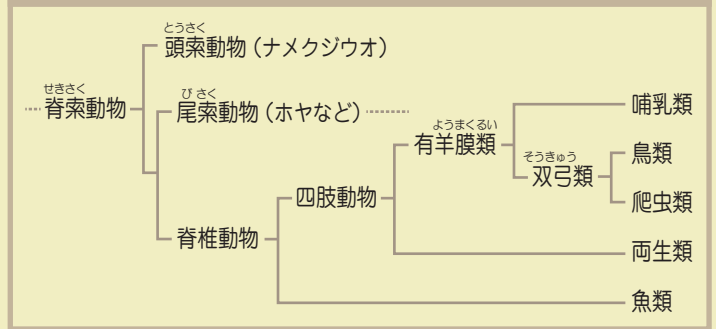
開催期間
4/29(土)~7/30(日)

“ホネ”と言われたら何をイメージしますか？海賊旗のように「恐怖」や「死」の象徴として描かれてきたこともあり、明るいイメージはないかもしれません。しかし、焼き魚や豚足、手羽先などのように食卓で見る機会もあるほど、実はとても身近な存在です。体の器官を支え、守り、動きを補助してくれるホネは、その存在なくして生命を維持することが不可能なほど、非常に重要な存在であることは間違いありません。そして、その役割を最大限に発揮できるよう、様々な進化を凝縮した器官の一部でもあります。本企画展ではこの“ホネ”の魅力や凄さ、生物の体に秘められた進化の謎について紹介します。

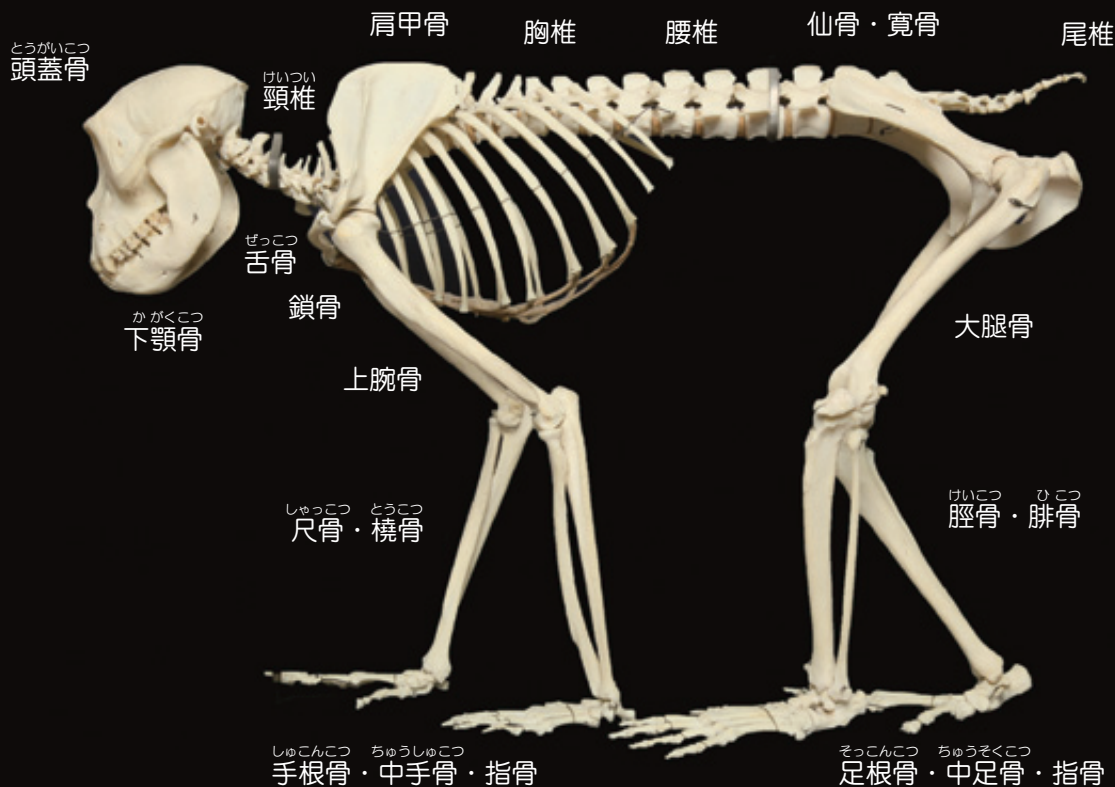
ホネとは？

我々ヒトのように背骨を持つ“^{せきつい}脊椎動物”は、約5~4億年前にナメクジウオという生物が起源になったと考えられています。そこから更に、魚類・両生類・鳥類・爬虫類・哺乳類といった現在の生き物へと派生していったとされています。つまり、上記の生物には大まかな共通点(頭→背骨→尻尾、途中に肋骨や肢あるいはヒレが付いている)があるのは「共通の祖先を持つためである」、ということで納得がいきます。

脊椎動物の系統樹



ニホンザルの全身骨格



ホネの多様化

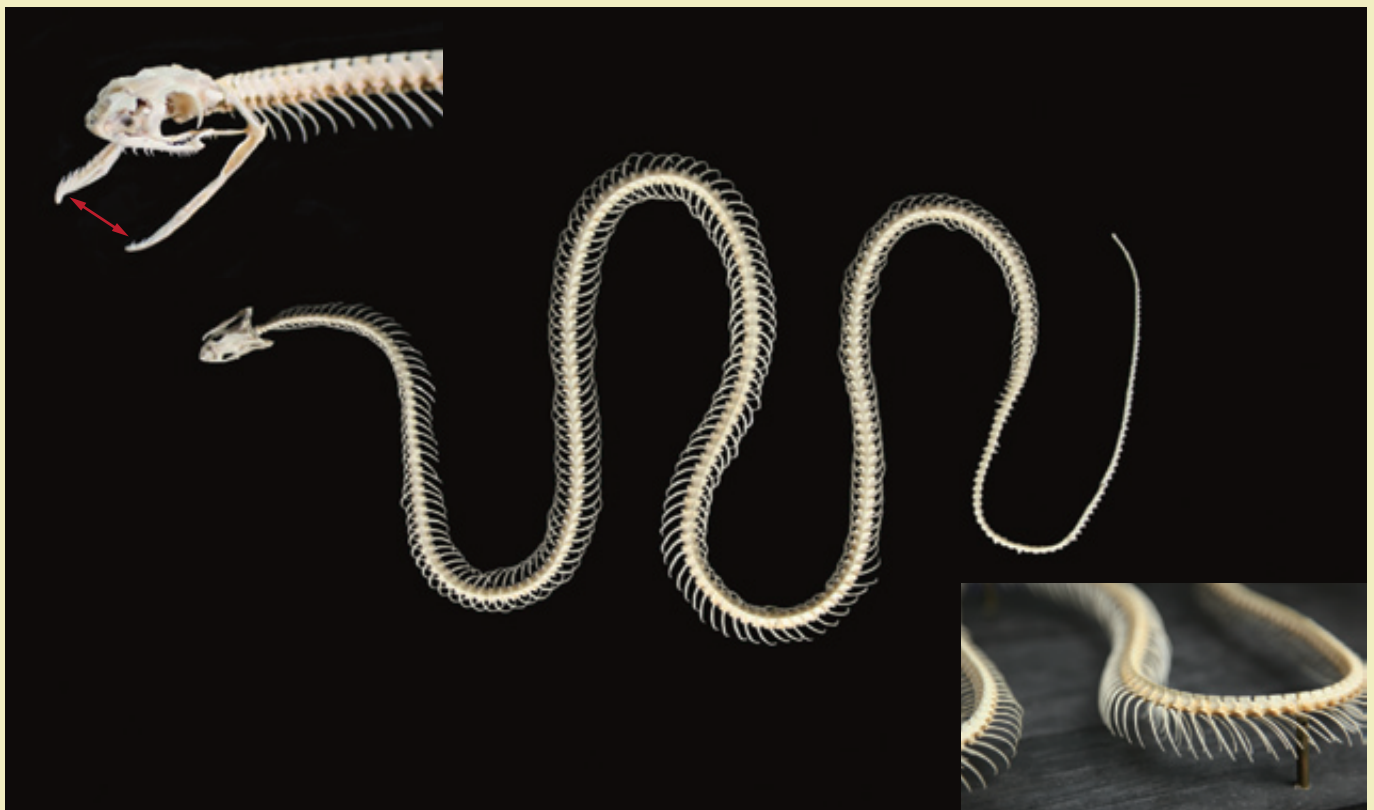
共通の祖先をもつことから、脊椎動物は大まかな体の作りは似通っていますが、ご存じの通り哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類・魚類は似ても似つかない点が多数あります。これは異なる生息環境に適応するための進化や、同じ生息環境下で生きる動物同士の競争を勝ち抜くために獲得された進化の賜物であると言えます。



展示の見どころ

せっかくなので企画展で展示する骨格標本の1つをご紹介します。下図の写真の左上の通り、ヘビの下あごは左右に大きくわかれており、とてつもないケツアゴであることをご存じでしょうか？このケツアゴの理由は、彼らの食事にあります。それは、右図のように自身の頭よりも大きな獲物を丸呑みすることがありますが、あごの骨が繋がっておらず（柔軟性のある靭帯では繋がっている）左右に大きく開くことで、飲み込むことができるようにする工夫だったのです。

あごと同様に、肋骨が胸部で繋がっていないため左右に大きく広がり、大きな獲物を飲み込んでもお腹が破裂しないようになっています。



企画展では、厳しい野生環境を生き抜くための動物の進化や戦略についても、ホネを通してご紹介します。ぜひ、様々な動物のホネの魅力を体感しにご来館ください。

付属園だより 1

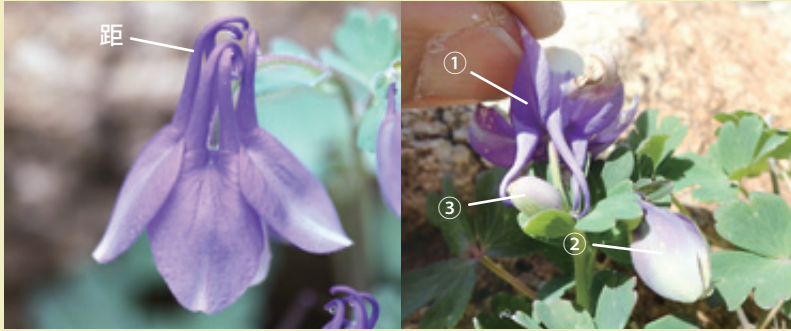
付属園では、北アルプスなどに咲く高山植物の栽培展示をするとともに、調査研究を行っています。ここでは、研究などで、わかった事柄についてご紹介いたします。

ミヤマオダマキ — 高山帯の砂礫地や乾いた草地に生える多年草

Aquilegia flabellata var. *pumila*

文：千葉 悟志（市立大町山岳博物館）
白井 伸和（白山高山植物園）

【花】



花は花弁に距をもつことから有距花冠と呼ばれます。花が複数つく場合、まず頂きにある花が咲き、つぎに最下位の花、その後は、一番下にある花から上にある花の順番で咲いていきます（①→②→③）。これはコマクサと共通した咲き方です。

【果実】



果実は袋果と呼ばれ、5～6個が集まってできていて、熟すると先端～中間にかけて裂けます。種子の長さは2～3mmで、表面には光沢があります。

【種子】



博物館での見ごろ
4月下旬～5月上旬

【ふしぎ発見！】



複雑な花の形は、マルハナバチの訪花に適していて、花粉が送受粉されるのだろうと想像されますが、高山で観察してみるとオオマルハナバチのミツを盗む行動（盗蜜）が目立ち、ほかのマルハナバチも周囲を飛んでいるものですが、訪れませんでした。

この現象は、北海道でも同じようで、なぜマルハナバチが訪れないのか、なぜは深まるばかりです。

【芽生え】



子葉は広い卵形で、表面にはごく短い毛がまばらに生え、裏面には長い毛が生えています。本葉は複葉で、表裏面から柄にかけて長い毛が生えています。根は垂直に伸びるとともに側根を枝分かれます。

付属園だより2 付属園の猛禽類たち

もう きん るい

猛禽類とは、獲物をとらえて離さない鋭い爪と、肉を切り裂く曲がった嘴を持つ、主に肉を食べる鳥類のことをいいます。一般に、タカの仲間のうち大きなものをワシ、小型のものをタカとよぶことが多いですが、これらの間に明確な区分はなく、同じタカ目タカ科に分類されています。付属園ではタカ目だけでなく、異なる種類の猛禽類を見ることができます。

トビ

タカ目タカ科



保護された場所や年齢は様々で、集団で暮らすトビファミリーと、単独で暮らすマサムネ、ポン吉、ツバサの計8羽を飼育展示しています。

「トンビ」とも呼ばれ、日本で最も身近な猛禽類として親しまれています。「ピーヒョロロロ」という鳴き声が特徴的です。付属園上空に野生のトビが現れた際は、なわばりを主張して鳴く姿がみられます。

フクロウ

フクロウ目フクロウ科



1996年に巣から落ちていたところを保護されました。御年27歳、付属園一の長寿です。まれに小さく「ホッホー」と鳴いていることがあります。

森の賢者といわれ、知恵の象徴とされています。夜行性のフクロウで、夕暮れに活動を始めます。日が沈み始めたところに様子を見に行くと、餌を食べる姿を見ることができます。

チョウゲンボウ

ハヤブサ目ハヤブサ科



2004年に巣から落ちていたところを保護されました。警戒心が強く、飼育員が獣舎から出るまで餌を口にすることはありません。

長い間タカ目と近縁とされてきました。しかし、DNAの分析の結果、タカ目とは系統が異なり、インコ目と近縁と考えられるようになりました。長野県中野市の十三崖には、天然記念物に指定された集団繁殖地があります。

ペリット



鳥類には歯がないため、基本的には餌をそのまま飲み込みます。消化しきれない毛や羽毛、歯、骨などを塊にして吐き出したものがペリットです。ペリットを出すことで、食道をきれいにする役割があるといわれています。

付属園では、ヒヨコ、鶏頭、馬肉、レバーを主に与えており、ペリットにはヒヨコの毛や鶏頭の骨などが多く含まれています。

(飼育員 渡邊咲晴)

げ た れき し 下駄スケートの歴史

令和5年1月下旬、新聞各紙に下諏訪町の下諏訪町立諏訪湖博物館に所蔵されています「諏訪の下駄スケートコレクション(合計130点)が、国登録有形民俗文化財に登録するよう文科省に答申されたとの記事が掲載されました。

下駄スケートは、大町山岳博物館にも市民の皆さんから寄贈していただいたものが所蔵されており、今回は博物館が展示・収蔵している下駄スケートについてご紹介します。

スケートの起源は、中世以降オランダやイギリスの沼沢地帯で始まったとされ、当初は交通の用具として、12世紀末には子供たちの遊戯として親しまれるようになってきたといえます。

とりわけオランダで12世紀頃から運河建設をきっかけに、結氷した運河がアイスリンク代わりとなり娯楽として発展していきます。

日本人が最初にスケートを目にしたのは、1792年から翌年にかけて結氷した根室の海面で、鉄刃をつけた靴を覆って滑る来航中のロシアのアダム・ラクスマンと言われ、その様子が『露西亜』に記録されています。日本人に正式にスケートを教えたのは、明治10年に札幌農学校へ着任したアメリカ人宣教師ウィリアム・ブルックスとされており、また仙台市博物館に隣接して「五色沼」と呼ばれる小さな池があり、かつての青葉城三ノ丸の堀を利用し、明治23年以降外国人が日本人にフィギュアスケートを教えたとされ、「フィギュアスケート発祥の地」と揮毫された碑が建立されています。

県内では明治34・35年頃ドイツ人家族が松本城外堀でスケートをしたのが、中部地方では最初といわれ、人々を驚かせたというエピソードがあります。

また諏訪湖でスケートが行われるようになったのは、明治30年代といわれ、鉄道の開通とともに、東京方面から諏訪湖へとスケート客が訪れるようになってきました。当時のスケートはそのほとんどが外国製の高価な物であったため、明治39年1月、下諏訪の飾職人・河西準之助は、下駄スケートを考案製作しました。下駄の下に金属製のブレードを取り付けたこの下駄スケートは安価で、子供達を中心に諏訪のスケート普及に多大な影響を与え、スケート熱は高まる契機となりました。諏訪湖周辺で普及したスケートは、明治30年代後半には現大町市にも普及してきました。

当時の大町中学校(現大町岳陽高校)では「滑冰器」(スケート)購入、生徒に奨励し、学校近くの田圃で練習を行い、明治末には校内大会が開催されました。現在でも田圃を利用しスケートの練習を行う大町南小学校のルーツはここに始まります。また結氷した木崎湖や中綱湖においても練習やスケート大会が催され、その後の大町のスケート文化の発展の基礎が培われていきます。山岳博物館にはこのころ子供たちが使用した下駄スケートが5足寄贈されています。(写真2)

(清水 隆寿)



写真1 諏訪湖畔にある「下駄スケート」発祥の地記念碑(諏訪湖博物館敷地内)



写真2 山岳博物館所蔵の下駄スケート

東小学校に地質授業の講師を派遣しました

令和4年11月25日（金）



旧大町スキー場付近には、立山などの北アルプスにある火山が噴火して飛んできた火山灰の地層が厚くたまっています。それは、今から約50～7万年前のことです。

この授業では6年生の皆さんを対象として、野外での地層観察と、教室での火山灰の観察を行いました。野外では、地層が広い範囲に続いていることを学び、斜面に登って触りながら、その特徴を観察しました。その後は教室で、採取してきた火山灰を水洗いして、含まれている鉱物を取り出しました。マグマの中で結晶した美しい鉱物を判別し、自分で名前を決める面白さを体験してもらいました。

第123回中部ブロック飼育技術者研修会に参加しました

令和4年12月14～15日



第123回中部ブロック飼育技術者研修会が愛知県名古屋市東山動植物園で開催され、19園館、21名が参加しました。1日目は研究発表が行われ、各園館が取り組んできた研究の成果を発表し、さらなる飼育技術の向上を目指し交流を行いました。2日目は東山動植物園内の施設研修を行いました。新しく建設されるトラ舎とオランウータン舎の見学、担当飼育員の方から普段見られないバックヤードの説明を聞くなど貴重な経験をさせていただきました。この研修で得られた知識を今後の飼育に活用していきたいと思えます。

シカ皮の活用ワークショップに講師を派遣しました

令和4年11月29日（火）



道の駅 ぼかぼかランド美麻で開催された「捨てられるシカ皮の活用ワークショップ」に講師として学芸員を派遣しました。

普段、博物館で行っている剥製づくりの技術の一部を応用して、ニホンシカの毛皮の鞣し（なめし）工程の一部を体験していただきました。見学を含めて20名弱の参加者の方と作業を行う中で、獣害、農林業の保護、地域の活性化のための情報交換を行うことができました。

普段目にすることもない毛皮の鞣しを体験していただくことで、博物館で行っている作業の一部を体験していただく機会となりました。

バードウォッチングin 仁科三湖を開催しました

令和5年1月21日（土）



木崎湖においてバードウォッチングを開催しました。当日は雪も降らず、比較的穏やかな天候の元、約20種類の野鳥を観察することができました。通年観察することができるカルガモやカワウをはじめ、大町では珍しいホオジロガモやトモエガモなども姿を見せてくれ、盛り上がりました。

野鳥は場所や季節によってみられる種類が変わるため、年間を通して楽しめるアウトドアアクティビティと言えます。これを機に、多くの方が野生動物や自然に興味・関心を持ってもらえるきっかけとなれば幸いです。

長野県林業大学の生徒に講義を行いました

令和4年12月6日（火）



長野県林業大学の生徒に、博物館の館長と学芸員が、山の環境に関する講義を行いました。

様々な環境変動が叫ばれる中で、森林、里山及び山岳といった山を巡る情勢も大きく変化しています。林業大学では、山と人とがつながる社会の実現に貢献する人材の育成に取り組むため、「山の環境学」として山に関する様々な環境について学ぶ学習プログラムを展開しています。

当日は、山に関する水循環と生き物についての解説を行いました。博物館では、今後も学校と協力し、未来を担う人材の育成に貢献してまいります。

アニマルトラッキングin 鷹狩山を開催しました

令和5年2月4日（土）



博物館が位置する鷹狩山で、動物の痕跡を探すアニマルトラッキングを開催しました。雪の上には野生動物たちの生活の痕跡である足跡が多く残されているほか、ものを食べた後の食痕も見つけやすく、その種によって形状や大きさは様々です。

当日は哺乳類5種、鳥類1種の足跡や食痕を見つける事ができました。多くの哺乳類は夜行性であるため、滅多にその姿を目視することはできませんが、痕跡を通してイメージすることでも楽しむことができます。雪が降った翌日は、ぜひ足元に注意して歩いてみてはいかがでしょうか？

2023年度 博物館年間スケジュール

年間スケジュールは変更となることがあります。今後発行される「山と博物館」「広報おおまち」「山岳博物館ホームページ」などをご覧ください。

2 階 ホール	さんぱく研究最前線 —北アルプスの自然と人—	3か月ごとに学芸員等による調査研究の成果「山の科学・研究トピックス」が展示されます。地元に根差した調査研究の成果が主体ですので、新たな地域発見につながるのではないのでしょうか。
------------	----------------------------------	--

月 (家庭の日)	常設展・企画展・関連イベント	講座・観察会・展示会など
4月 (15・16)	企画展「ホネ展」 4月29日(土)～7月30日(日) ■ミュージアムトーク 4月29日(土)、5月20日(土)、6月17日(土)、7月15日(土) 時間：1回目10:30～、2回目14:30～ 会場：市立大町山岳博物館 特別展示室 ※入館者対象(通常の観覧料が必要です)・申込み不要 ■ワークショップ「ホネホネパズル講座」 5月13日(土) 時間：9:30～12:00 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：どなたでも(定員20名) ※参加無料、要申込み 長野県山岳総合センター TEL: 0261-22-2773 ■ワークショップ「自宅でできる骨格標本づくり」 6月24日(土) 時間：10:00～15:00 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：どなたでも(10歳以下は要保護者同伴) 定員：15組(要事前申込み) 参加費：¥500/組 ■講演会「私がホネにはまるまで —なにわホネホネ団20年の活動から—」 7月2日(日) 時間：13:00～15:00 講師：西澤真樹子氏(なにわホネホネ団団長) 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：どなたでも(定員40名) ※参加無料・要事前申込み	■友の会総会記念講演会「虫の眼で見た大町・安曇野の自然」 日時：4月23日(日) 13:00～15:00 講師：那須野 雅好氏 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：大人(定員30名) ※参加無料・要事前申込み
5月 (20・21)		■付属園まつり 5月2日(火)～5月6日(土) ◆付属園クイズラリー (全日9:00～16:00) ◆ライチョウガイド (全日9:00～16:00) ◆動物観察ツアー (5月3日(水)・4日(木)11:30～、15:00～) ◆おおまびよんと遊ぼう (5月4日(木)11:30～、14:00～) ◆動物写真展(開館時間中) ※参加無料・申込み不要
6月 (17・18)		■大町自然探検隊(年8回) 日時・会場：当館公式HPにてご確認ください 対象：どなたでも ※参加無料・要事前申込み
7月 (15・16)		■わくわくチャレンジ教室「夜の虫を観察しよう」 日時：7月27日(木) 19:00～21:00 会場：山岳総合センター、大町公園周辺 対象：小学生とその保護者(定員20名) ※参加無料・要事前申込み 長野県山岳総合センター TEL: 0261-22-2773
8月 (19・20)	企画展「北安曇の自然と文化」 8月8日(火)～10月1日(日) ■ミュージアムガイド 9月17日(日) 時間：1回目10:30～、2回目14:30～ 会場：市立大町山岳博物館 特別展示室 ※入館者対象(通常の観覧料が必要です)・申込み不要	■自然ふれあい講座 「みんなで温暖化ウォッチ ～セミの抜け殻を探せ!～」 長野県環境保全研究所・山岳博物館共催事業 日時：8月3日(木) 10:00～正午 会場：大町公園・市立大町山岳博物館周辺 対象：小学生とその保護者(定員20名) ※参加無料・要事前申込み 長野県環境保全研究所 TEL: 026-239-1031
9月 (16・17)		■友の会創立45周年記念行事 講演会 「三戸呂拓也エベレストに行く(仮)」 日時：8月19日(土) 13:00～15:30 会場：サン・アルプス大町 対象：どなたでも(定員100名) ※参加無料・要事前申込み
10月 (14・15)	企画展「大町と絶滅動物」 11月3日(金)～1月28日(日) ■ミュージアムガイド 11月3日(金)、12月2日(土)、1月7日(日) 時間：1回目10:30～ 2回目14:30～ 会場：市立大町山岳博物館 特別展示室 ※入館者対象(通常の観覧料が必要です)・申込み不要 ■講演会「オオカミを探す(仮)」 11月11日(土) 時間：13:00～15:30 講師：八木博氏(ニホンオオカミを探す会代表) 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：どなたでも(定員40名) ※参加無料・要事前申込み	■友の会創立45周年記念行事 登山 「三戸呂拓也と行く爺ヶ岳登山(仮)」 日時：8月20日(日) 終日 会場：爺ヶ岳 対象：どなたでも(定員20名) 参加費：500円/人(要事前申込み)
11月 (18・19)		■ワークショップ「信州の昆虫を食べよう!!」 会場：12月9日(土) 9:00～15:00 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：どなたでも(定員20名) 参加費：¥300/人 ※要事前申込み 長野県山岳総合センター TEL: 0261-22-2773
12月 (16・17)	常設展「山と美術」 2月1日(木)～3月31日(日) ■ミュージアムガイド 2月18日(日)、3月17日(日) 時間：14:00～(30分程度) 会場：市立大町山岳博物館 特別展示室 ※入館者対象(通常の観覧料が必要です)・申込み不要	■山のサイエンスカフェ inさんぱく2023 日程3月3日(日)・10日(日) 時間：各回13:30～16:00 会場：市立大町山岳博物館 講堂 対象：大人(定員 各回30名) ※参加無料・要事前申込み
1月 (20・21)		
2月 (17・18)		
3月 (16・17)		

編集・発行



市立大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

—創立1951年—

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
 市立大町山岳博物館 編集責任者 鈴木啓助
 TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
 ☒ E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
 URL: https://www.omachi-sanpaku.com

2023

発行日 2023(令和5)年3月22日

春号

第68巻1号

印刷 有限会社北辰印刷

〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
 TEL. 0261-22-3030 FAX. 0261-23-2010